今週の倫理

2010.5.8〜5.14

663号

家庭磨きに徹し 仕事に全力を傾ける

五月病とは「新年度の四月に入学・入社した新人に、五月ごろになると現われる精神の不安定状態」（『大辞泉』）をいいます。皆様の会社の新入社員の方々はいかがでしょうか。

結婚式場を営むA社長は、多くの社員に接してきました。そして長続きする社員の秘訣は、仕事の環境だけでなく、育ってきた環境が影響していると言います。それは「家庭」です。

例えば、両親の仲が良く、躾が行き届いた明るい家庭で育ってきた人は、仕事に取り組む姿勢が違います。悩みを両親へ相談できることも強みのひとつでしょう。また、事情により親の収入だけでは学費が賄えず、アルバイトなどでの収入を学費の一部としてきた人は、少々のことでは挫けない強い精神を持っています。

以前のA社長は〈新入社員は三年続けば儲けもの。五年続けば御の字〉と考えていました。しかし、ある年の新入社員の目の輝きの違いを見て、背景にある家庭環境の大切さに気がついたのでした。今では学校の先生へ「成績優秀な生徒よりも、家庭環境がしっかりしている生徒を紹介してくれ」と伝えているようです。

ある中等少年院のK院長は、少年犯罪を起こした数多くの子供たちと接してきました。そして、少年犯罪を起こす子供たちは少なからず、家庭環境が影響していると言います。「両親の関係が悪い」「離婚までいかなくても家庭内別居している」など、子供たち自身が望んだものではない「家庭の姿」が反映するのです。

しかし反面、少年犯罪の一歩手前で踏みとどまれる子もいるようです。「このようなことをしてしまったら…」と事の重大性に気づき、そして両親や兄弟、親友など身近な人の悲しむ姿が思い浮かぶ子は、一歩手前で踏みとどまることができるのです。自分が誰かと繋がっていると感じることができる子は、一線を越えることがないのです。

倫理研究所の丸山竹秋会長は、家庭について次のように述べています。

家庭とは、いわば、人生の旅路におけるハキモノである。靴とか草履などのようなもので、ハキモノが悪ければ歩けない。歩けない人生ほどつまらないものはなかろう。

と同時に家庭は聖堂であるべきである。（中略）なぜか。家庭はこの聖なるべき自分自身が、そこに生命のやすらぎを得、そこから世の中に役立つべき仕事に出ていくところであるからである。

（『倫理経営原典』四四四頁）

家庭は人生を歩んでいくために必要な「履物」です。その履物の両方が揃っていなければ、上手く歩くことはできないでしょう。経営者においても、社員においても、バックボーンとなる家庭の姿が影響します。今日一日の仕事に全力を尽くせるよう、日々、家庭磨きに力を入れていきたいものです。

え・栗木　映